

新 知 故 温

静岡県立中央図書館所蔵の貴重書紹介 (71) 平成 15 年 7 月 1 日

江戸期・明治初期の暦書 (その 1)

本居宣長 『真暦考』(449.3/5 K087/8)

平成 15 (2003) 年 2 月 27 日の新聞各紙は、奈良県明日香村石神遺跡で、日本最古の暦の木簡が発見されたことを報じました。中国から朝鮮半島を経由して日本に伝えられた元嘉暦をもとに、持統天皇 3 (689) 年の 3 月と 4 月の暦が木簡の表裏に記されていました。元嘉暦は日本で初めて使われた暦とされます。暦について、『日本書紀』には欽明天皇 14 (553) 年 6 月に内臣を百済に派遣し、医・易・暦の博士を交代で勤めさせること、卜書・暦本・各種の薬物を送ることを求めたことが記されています。また、推古天皇 10 (602) 年 10 月に百済の僧勤勒が来朝し暦本などを献納したこと、陽胡史の先祖玉陳が勤勒から暦法を学んだことなどが記されています。中国の宋から伝わった元嘉暦を百済では滅亡 (661 年) まで使っていたので、今回の木簡の発見により、『日本書紀』の記述が例証されたといえます。

本居宣長 (享保 15 (1730) 年 ~ 享和元 (1801) 年) は伊勢国松坂に生まれ、国学を大成させた人物です。本居宣長は、中国の暦 (太陰太陽暦) が伝わる以前、日本では、草木の芽生えや開花、鳥の鳴き声や虫の動きなど天地自然の変化にもとづく日本固有の暦が使われていて、それは中国の暦より優れていたと考えていました。自然暦ともいえる日本固有の暦を考察したものが『真暦考』です。真暦とは、「皇祖神の造らして、万の国に授けおき給える、天地のおのずからの暦」であり、「とふときめでたき真の暦」のことであると本書に記されています。

本居宣長は、真暦の特徴として、おおらかさを挙げています。何月何日と定めるのではなく、人々は生活上の経験から自然の変化を感じ取り、それぞれの季節のいつごろかということをおおらかに定めていたとしています。例として「ひさかたの天のかぐや山 此ゆうべ霞たなびく春たつらしも」(『万葉集』巻 10・1812)「春過て夏来るらし白妙の 衣ほしたりあめのかぐ山」(『万葉集』巻 1・28) などの万葉集の歌が引用されています。たなびく霞で立春を知り、ほされた衣で夏の到来を知る、こうしたおおらかな暦であったとしています。中国の暦 (太陰太陽暦) では、月の満ち欠けの周期を利用し 1 年 12 ヶ月 = 約 354 日とし (太陰暦)、太陽の周期 1 年 = 約 365 日 (太陽暦) との差約 11 日を 3 年に 1 度ほど、閏月を入れることで調整しています。中国の暦は、実際の季節の変化とずれているわけです。前述の木簡に書かれていた持統天皇 3 (689) 年の前後を『日本暦日原典』(449.81/4) で調べてみると、持統天皇 2 年の 1 年の日数は 354 日、持統天皇 3 年は閏月が入り 8 月が 2 回あって 384 日、持統天皇 4 年は 355 日となっています。暦と季節がずれていることが分かります。その点、自然の変化そのものを読み取るおおらかな真暦は自然のサイクルに合致し、中国の暦より優れていると宣長は主張します。本書は、暦を題材に、日本固有の文化を再認識しようとした国学者の考え方の一端を示すものです。なお、跋文に「天明の二とせという年のなが月の十日あまり二日の日 本居宣長考畢」とあり、天明 2 (1782) 年 9 月に『真暦考』が成稿したことがわかります。初版は寛政元 (1789) 年 4 月、版元は松坂の柏屋兵助とされます。当館所蔵の資料は、出版者が松坂の柏屋兵助のもの (当館請求記号 449.3/5) と大坂の伊丹屋善兵衛のもの (当館請求記号 K087/8) の 2 種の版本がありますが、いずれも刊行年が記されていません。

【参考文献】

- 『本居宣長全集』(121.2 / 142) 第 8 巻
- 『日本人の宇宙観』(440.21 / ㍿)
- 『暦の百科事典』(449 / 10)
- 『暦の雑学事典』(449 / ㍺)